

桃太郎と箱舟型モチーフ

井上 隆 明

一 「桃太郎」のコンテクスト

日本の五大昔話に、ご存じの「桃太郎」がある。現行の発端出生部分は、桃の川流れ——拾う婆——帰宅——包丁を当てる仕種——偶然な桃割れ——誕生、のキー・ワードを持つ。しかし地方山村の一般的生活として、大きな実を割るのに包丁(1)をもちだすのは、近代に入ってからだろうし、伝説とはちがう昔話の変容性を窺視できる。原型に近い資料は、近世本にもとめねばなるまい。

朋誠堂喜三(2)の滑稽本『古朽木』は安永九年板だが、自序により同五年(一七七六)正月の執筆と分かる。その巻之三に「むかしく爺(ちい)と婆(ばい)とあり。爺は山に薪(たきぎ)を撫(こ)り、婆は川に衣を濯(すす)ぶ。川上より一つの桃流(なづれ)来る。婆が曰、今一つ流来よ、爺に呈せんと。既にして又一つの桃流来る。則此二つを収めて家に帰り、一桃は夫に食はしめ、一桃は自ら食す。斯て爺婆忽ち壮年の容(かたち)に變じ、一男子を儲く。是を桃太郎と号す……」と紹介する。

曲亭馬琴『燕石雜志』は文化六年(一八〇九)執筆(八年正月板)で、その巻之四「桃太郎」では、①「桃の実一ツ流れて来つ。(婦

が)携へかへりて夫(おとこ)に示すに、その桃おのづから破(やぶ)て、中に男児ありけり」②「老婆桃の実二ツを得て家へ携へかへりて、夫婦これを食(くら)ふに、忽地わかやぎつ。かくて一夜に孕(はら)ことありて、男子を生めり」の二説を挙げる。草双紙の赤本にも桃太郎物は数種あり、享保八年(一七二三)という板行年代を明確な古さで示す天理図書館蔵『もゝ太郎』(丸屋九左衛門板)から、書き出しを抄出してみよう。

ちゝハ山へしばかりに、ばゝは川へせんだくに行けるが、大きなもゝながれる。

(婆)「もふひとつ、ながれてこい。ちゝにくはしよ」……

(同)「おふ、ちゝどの、わかやいだ。ふしぎな」

と、八食べて若やぎ孕むV型であつて、『古朽木』や馬琴(2)に近い。注意すれば両者とも、八二個の桃漂流V型を採録するのに気づく。赤本の「もふひとつ、ながれてこい」は、元来二つ流れていたのを、改変したにちがいない。現に赤本のたぐいは構成に趣向を加えて、すなおには筋をたどらぬのが通例だ。話者が戯作者であり、作者名を明示する時代になってきたゆえんである。だが、「もふひとつ」には原型の影を色濃く感じられるので、さらにつぶさに検討し

てみたい。

おそらく二個の桃の古型は二つの箱が流れてきて、一方に桃が入っているような、箱入り漂着ではあるまいか。箱舟漂着タイプが秋田県、山形県の山村漁村に多く残ることからの類推である。が、中は桃とはかぎらず、招福童子形もしくは招福動物出現のとき、箱舟漂流型Vをとるのに留意したい。仮に箱入り型を七つに分けてみる(注・K印は国学院大学民俗文学研究会編刊『伝承文芸』11号・昭和49年11月、所載)

a 桃太郎タイプ

秋田県由利郡鳥海町^{もはやけ}百宅^{ももやけ}二個漂着。K一〇一ページ

同郡仁賀保町冬師^{ふゆし}同。K一〇二ページ

同郡鳥海町上直根^{うしろね}赤白の二個漂着。K一〇三ページ

同郡東由利町大吹川^{おほいかわ}同。『話の三番叟』昭和52年5月、九三ページ

同県仙北郡^{せんほく}南外村南栖岡^{なんせおか}一個漂着。『全国昔話資料集成・角館昔話集』同50年4月、一一〇ページ

酒田市大豊田字上星川^{かほし}同。『酒田の昔話』同51年3月、四一ページ

b 犬と打出ノ小槌タイプ

山形県東田川郡立川町狩川^{かしのがわ}香箱一個漂着。善い爺様と悪い爺様型。『季刊民話』2号・同50年3月、一九九ページ

c 花咲爺の犬タイプ

秋田県由利郡象潟町長岡^{ながおか}赤白の二個漂着。K一三九ページ

d 舌切雀タイプ

同郡金浦町飛^と二個漂着。K一四五ページ

同県北秋田郡阿仁町^{あに}三枚^{さんまい}同。『阿仁町伝承民話』3集・昭和49年8月、四五ページ

同町中村^{なかつむら}同。『秋田むがしこ』2集・同43年7月、六七ページ

同県鹿角市大湯^{おほゆ}一個漂着。『同』三六ページ

e 蟹食いタイプ

同県由利郡金浦町飛^と二個漂着。K一五〇ページ

f 雁取りの白い犬タイプ

同県南秋田郡昭和町豊川^{とよがわ}一個漂着。『秋田むがしこ』昭和34年9月、六六ページ

g 瓜子姫タイプ

同県雄勝郡羽後町田代^{たしろ}同。『昭和四十九年度秋田県教委委託調査報告書・秋田県の昔話伝説』3集(奥付ナシ)二四ページ

二 箱舟型のコンテキスト

昔話「桃太郎」の類型を拾ってみれば、箱流れ型が地方の片隅にひっそりと生きていて、テクストに近いのを思わせる。この型は全国に散在するが、とりわけ秋田に多く残っていた。桃太郎にかぎらず花咲爺の犬、舌切雀など爺婆に福をもたらす小動物もまた箱に入って川を下る。箱流れだけを枠組みにすると、列島をはみ出て海外にも同型があつて、おなじような導入部であることに気づく。四つのタイプに分けて考えたい。

A 漂着タイプ(流れてくる) || エジプトの冥界神オシリスは兄^(ト)

弟セトに殺され、箱入りでナイルに捨てられる。ビプロスの岸に漂着し巨大樹となる。パピロニアのアツカド王朝始祖サルゴン一世、ノアの箱舟型のデウカリオンとピュラ、ダナエと子ペルセウス、アルカディアのラゲア王妃アウゲと子、テネドス島の祖テネスと妹ヘミテア、ディオニュソスと母セメレー（ラコーニア伝承説）、ローマ始祖ロムルス……枚挙にいとまない漂着タイプである。東南アジア「スリー・ラーマ物語」では、竹姫の分身が箱で流され拾われる（宮武正道『南洋文学』昭和14）し、瓜子姫に似る。『ラーマ・ヤナ』のシータ妃も、生後器で川に流される。済州島の三人女また舟で漂着（高麗史）し、五穀と家畜といっしょのパンドラ型をとる。

B 降下タイプ（下る）

古朝鮮の伽羅国（任那）始祖首露王ら六人は卵形で、紅い布に包まれ箱入り降臨（三国遺事・駕洛国記）する。同型としてキリスト誕生譚も考えられるが次章にゆずる。

C 封閉タイプ（匿す）

聖書に多い。たとえば「萑の箱舟を之がために取て、之に瀝青と樹脂を塗り、子をその中に納て、これを河辺の葦の中に置けり。……これを啓きて、その子のをるを見る。嬰兒」がモーセ（出埃及記二：三）だった。またイスラエルの幕屋ないし神殿の中心をなすのが、神の箱である。構造は出埃及記二五：八以下にくわしい。ほかに証しの箱、契約の箱、エホバの箱、誓いの箱もあり、旧約期の象徴物に見える。

ギリシャ神話のレダはゼウスと交わって卵をうけ、箱に入れてしまふ。そこからヘレネーが誕生する。アフロディテは赤児アドニス

（セム語のアードンは主の意という）を箱に隠しておく。日本には首の小箱（実は愛宕地蔵）の命により、導師となった話（室町物語「愛宕地蔵の物語」）もある。

D 保育タイプ（育てる）

アテナイ王エリクトニオスを不死身にしようとして、箱に入れるのは父アテナである。箱に二つの卵と燕が入っていて、そこから生まれたのが殷の始祖契（淮南子地形訓、呂子春秋音初編）だった。新羅の閔智（子供の意）は金の櫃から生まれ（三国遺事）金氏を名乗る。おなじ新羅の第四王脱解また、櫃の卵（同）から誕生している。中国の槃瓠は瓠離に虫として入っていたが、開けると竜犬に变身（みすず書房版『中国古代神話Ⅰ』昭和35）した。以上は漂流型ではないものの、箱を強調するコードとして挙げておく。

三 キリスト誕生説話のコンテクスト

箱舟型モチーフは、キリスト説話にもありそうだ。通常馬小屋生まれとされるものの、聖書本文は「マリア月満ちて初子をうみ、之を布に包み、馬槽に臥させたり」（ルカ伝福音書二：七）で、馬小屋の描写はない。マタイ伝福音書の誕生場面も、三賢者（一：一八）だけにとどまる。ふつう馬槽は飼葉桶、秣桶とよぶが、その原質はいかがなものであろうか。

降誕図像の保存は、比較的ドイツに集中している。木版彩色画の技術にすぐれていたためにちがいない。管見に入った作品で最古のものは十一世紀までたどられ、最盛期は十六世紀だった。他ではパ

リ国立図書館蔵「メッス時禱書」が十四世紀後半。スペイン、ヴァルセロナ、カタルーニャ美術館「キリスト、聖母の生涯のレターブル」が一三七五年製である。乳児キリストは箱か籠に納まり、動物は馬でなく、いのように牛とロバとに固執している。牛は豊饒角、ロバは忠実な従者・信者の表象と解けようが、問題は飼葉桶である。

もういちど、ルカ伝福音書の「馬槽に臥させたり」を思い起こしてみよう。馬小屋は前後に現れない。従って生誕の表現記号は、飼葉桶一点にしぼられてくる。フランス語版の飼葉桶は *creche*、ドイツ語版が *Krippe*、英語 *creche* だかゝ仏語と同じ。古英 *crib* の語源はチュートン語 *box, hut* のことという。箱または人の住む小屋の意味があるゆえか、生誕図像に箱舟型飼葉桶と小屋が必ず描きこまれている。*box (crib)* の意義に近づいてみよう。前述の箱舟漂流型神話例からして、おそらく箱は小き子神の宿りと神の放浪とを代弁するし、人間の通過聖器としても解釈できる。弱者救済の救世的神格を納れ、人間世界に移動していくのだ。不可視から可視へと転換する物語作用を見のがしできまい。

箱には暗い洞窟のイメージも重なってしよう。洞窟が豊饒神の母胎に相似ることは、セムの至高神パールが洞に現れ、古代ローマの洞穴が神ノ宿とよばれ、ゼウスがクレタ島の洞穴で育てられたのも推測できる。またヘブライ語の冥界シェオールは穴の意だし、古神話期の冥界は豊饒型である。近い例では沖繩のアカマタ、クロマタや、オホナムチとスクナヒコナ（万葉三五五）も洞窟にかかわっている。

聖書期は形容文飾の時代でもある。素朴な箱のままで説得力に欠けよう。蛇が善義（蘇生豊饒）から悪義（誘惑異端）へ転換するの聖書期だった。たぶん生命ノ木と洞窟の集合体である「箱」は、聖書期にさしかかり、舟・籠・飼葉桶へと装飾分離されていったはずだ。同質異像化時代の到来になる。こうしてたどってくれば、次のような意味解釈法に考えつく。

原 像	生命ノ木 洞窟	意 味 表 現	箱	意 味 内 容	箱舟 虚ろ舟 籠 飼葉桶 赤い箱舟 吉の箱舟	意 味 作 用	主神(表示)的意味 補佐(伴示)的意味	物 語 活 動	桃太郎 鬼
--------	------------	------------------	---	------------------	---------------------------------	------------------	------------------------	------------------	----------

桃太郎の昔話については、さいきんの滑川道夫氏、鳥越信氏にいたるまで、多くのことが語られている。そうした桃太郎とは別に古型と見られる箱舟モチーフ・タイプが、列島の片すみで養われていたと知るとき、改めて私どもは原像の持たねばならぬ生命力の眩しさに気づくのだ。そして箱舟型モチーフは、普遍性のある二つの神話的法則を教えてくれはしまいか。すなわち「異国神の一は、箱に入って漂着もしくは降下し、悪者退治のうえ、平和郷をきざく」
「異国神を納めている赤または吉の箱は、白か凶の箱を伴って漂着

するのが古型になる」である。死の起源を説くバナナ型神話、お椀ノ舟の一寸法師など、この法則への感觸からいくつもの派生型を見いだすことができそうだ。

注(1) 包丁は、巖谷季雄(小波)著、岡野春汀画『袖珍 日本昔噺』

(明治41年6月合冊本・博文館)に見えはじめる。「勝手の方から包丁を持ち出し、件の桃を刎板にのせて真二つにしようとした」

(2) 草刈り型もある。「ぢまはやまへくさかりに」板桃太郎昔語・安永年鱗形屋板・大東急記念文庫蔵。従って明治18年9月のタビッド・タムソン訳述縮緬本 MOMOTARO OR LITTLE PEACHLING の went to the mountain to cut grass は前掲本の訳出か。

(3) 赤と白二個漂流の場合、秋田昔話では「実の入っている箱こっちゃ(こっちへ)来い」と唱え言して・赤い箱のほうを引き寄せる。

(4) バルフィンチ著、野上弥生子訳『希臘羅馬神話・伝説の時代』春陽堂・大正11年11月。以下、神話の多くは岩波版『ギリシア・ローマ神話辞典』に拠る。

(5) 拙稿「ドイツ中世の物語絵」論叢29号・昭和57年3月

(6) 彩色画 Geburt Christi : Berlin Deutsche Stadtbibliothek.

(7) J. T. Shipley : Dictionary of Word Origins. USA 1945

(8) 拙稿「豊饒型冥界の構造」論叢24号・昭和54年7月

(9) 同「聖蛇の表象と解釈」同28号・同56年9月

(いのうえ たかあき・秋田経済法科大学)



〔図説明〕キリスト生誕の木版画。㊦ミュンヘン国立グラフィック収集館蔵、一四二〇年頃。㊧シュトラースブルク制作の『ドイツ古版本』から、一四八〇年。籠型と箱型の例である。